

平成 23 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520366  
 研究課題名 (和文) ニューカレドニア地域と周辺の危機に瀕した言語の文法記述および辞書の編纂  
 研究課題名 (英文) A Study of the Grammar and Lexicons of Endangered Indigenous Languages in and around New Caledonia  
 研究代表者  
 大角 翠 (OSUMI MIDORI)  
 東京女子大学・現代教養学部・教授  
 研究者番号：10141293

研究成果の概要 (和文)：本研究ではニューカレドニア地域の 28 の先住民語のなかでも特に危機的状況にあるティンリン語とネク語について毎年の現地調査によるデータをもとに言語の記述、分析、辞書の編纂を行った。本研究によって得られた知見はオセアニア言語国際学会 (2007, 2010) 等で発表された他、学術論文や著書の形で広く一般言語理論やタイポロジー研究に寄与し、また *The World Atlas of Language Structures* などに貴重な一次資料を提供した。また、ニューカレドニアとメラネシアの言語に関して日本、オーストラリアやフランスの研究者との共同研究も進め、ワークショップやセミナーも行った。

研究成果の概要 (英文)：In this research project, we have investigated endangered indigenous languages in and around New Caledonia, with the purpose of describing their grammars and compiling dictionaries. Specifically, Tinrin and Neku, the two most endangered Oceanic languages have been investigated through fieldworks carried out every year. The outcome of the research done in this project has appeared in conference papers (International Conference on Oceanic Linguistics 2007 and 2010, etc.), journal articles, and chapters of books (the main publications listed in 5), in addition to ongoing grammar and dictionaries. A Neku folk tale was also published as a children's book. This research has made a significant contribution to Oceanic linguistics in providing several new linguistic discoveries and filling gaps in comparative linguistics, in addition to shedding light on, and describing the least-investigated languages of New Caledonia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：記述・フィールド言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、消滅の危機に瀕した言語、先住民語、音韻・文法記述、辞書・テキスト、オーストロネシア言語、国際研究者交流、ニューカレドニア：オーストラリア：フランス：アメリカ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題の対象とする言語はメラネシア地域のニューカレドニア及び周辺にあるがこの地域は狭い面積に多くの言語が密集し言語学的にも非常に多様性に富んでいる。さらにニューカレドニア本島中南部の先住民語、ネク語、ティンリン語はそれぞれ200人前後の話者しか持たず深刻な消滅の危機に瀕している。先行研究は研究代表者による『*Tinrin Grammar*』(1995) 以外はほとんど存在せず、特にネク語に関しては包括的な文法も辞書も書かれていない状態であった。

研究代表者はネク語の話される地域でフィールド調査を数年来行い、研究開始時には住民の協力支援体制、友好関係を確立していた。また、オーストラリアやフランスのオセアニア研究者等との研究協力関係も築かれていた。課題とする文法記述、辞書の編纂は膨大なデータの収集・調査と整理、分析、執筆作業を要するが、言語が完全に衰退してしまう前に記録に留めねばならない緊急性がある。

## 2. 研究の目的

ニューカレドニアには28の先住民語が存在するが大半がまだ十分な文法記述、辞書などの記録を持たず、現代社会の変容の中で、共通語のフランス語に圧され、消滅の危機に瀕している。1.で述べたように研究代表者は特に緊急に記録を残す必要のある2言語、ネク語とティンリン語、更には周辺地域の先住民族の言語の調査と記述を行い、文法、音韻記述、辞書の編纂を完成したいと考えている。

少数民族語の調査は多彩な言語現象や認知体系の解明により言語理論研究に大きな意義を持つだけでなく、言語の進化、先史人類の移動、異言語間の接触、発達過程を明らかにする上からも非常に重要である。また、言語がその民族の生活、伝統、文化の集大成かつ遺産であり、独特な世界観を映し出しているものであるという点からも、緊急に遂行されることが望ましい。

## 3. 研究の方法

本研究はニューカレドニア本島での現地調査を中心にこれまで記録のほとんど存在しない言語を調査し、周辺言語の情報収集も含め、データベースを作成する。そしてそのデータに基づき、文法記述と辞書の編纂を行う。

### (1) ニューカレドニア及び周辺地域の言語情報の収集

① 研究代表者は毎年8月～9月にニューカレドニアの先住民部落(ワウエ)とヌメアで現地調査を行い、ネク語話者から聞き取り調査、ナレーション、談話、口承物語の録音、部落の伝統行事や生活の写真、ビデオ撮影などを行った。録音はMDレコーダーおよびエディロールを使用、できる限り現地で話者の協力のもと、文字おこしを行った。

② チバウ・カナク文化センター、ニューカレドニア大学、シドニー大学、オーストラリア国立大学、オークランド大学でメラネシア言語の調査を行った。また、フランスCNRSやオーストラリアの研究者と協力関係を築き、ワークショップ、セミナーなどで意見交換、情報収集を行った。

③ 研究協力者は近隣の言語(オロエ語)、周辺島嶼の言語(コーヴェ語、パプア諸語)の実態や社会言語状況、言語シフトのメカニズムを調査した。

### (2) 収集したデータの整理、コンピューター入力、テキスト化、辞書項目の作成、ウェブ化、資料の提供

① 収集した音声資料は文字化しコンピューターに入力、また映像資料やノートも整理し辞書項目やテキストを作る作業を行った。データの量や複雑さのために作業には多くの時間と専門的知識を要し、アルバイト助手を用いて出来るところは限られたものとなった。

② 資料は音声分析、形態素分析、意味分析、テキストの揃ったセットとしてPRAATなどを用いて書き直し、ウェブ化やアーカイブに提供する資料としての準備を行った。

### (3) 文法記述、辞書編纂

- ① ネク語のデータは文法分析を行い、カテゴリー毎の記述を進めた。同時に仏語、英語との3言語辞書の項目の執筆を続けた。
- ② ティンリン語の辞書項目は大半を書き終えていたが、新たに動植物の語彙や未入力だった語彙を追加入力した。
- ③ フランス語訳は海外共同研究者が行い、部分的にアルバイト助手を用いた。

## 4. 研究成果

ニューカレドニアの先住民語は近年チバウ文化センターを中心として主に辞書の編纂が進行しているが対象言語は比較的話者数の多い言語であり、また文法研究は非常に少ない。本研究により、ティンリン語、ネク語の文法構造、語彙、意味、認知体系が明らかになり、これまで研究がほとんど無く未知の部分が多く残るニューカレドニアやメラネシア地域の言語の一端に光をあてることができた。

本研究の主な成果は、(1)実際の現地調査によって得られた音声資料を基としたデータベースの構築、(2)地域および国際的なネットワークの構築や話者コミュニティへの影響、(3)文法記述、辞書編纂の過程での研究発表その他である。

### (1) データベースの構築

① 2007年～2010年の現地調査(合計約12週間)により、ネク語、ティンリン語によるナレーション(主にルイ・ウインベ、ギュスターヴ・カウパによる)、日常会話(主にジゼル・ウインベとウジェニー・ウインベ、マリーポール・ウインベによる)の録音、語彙や文法項目のチェック、テキストの文字化、民話の採話をを行った。収集された音声の一次資料、形態素分析、意味付きテキストはデータベースとして構築されつつある。完成したデータベースは文法記述や辞書作成に使用されるだけでなく、ロンドン大学やハワイ大学の危機言語ドキュメンテーションプログラムが中心に行っているアーカイブに保存しておくことができる。これらの資料はさらに一般言語理論、比較言語学、タイポロジー研究、考古学、文化人類学研究などに寄与するものである(研究代表者の著書、*Tinrin Grammar*はマックス・プランク発達人類学研究所による*The World Atlas of Language Structures*その他の多くの文献に多数引用

されている)。

② ニューカレドニア、オセアニア地域の文献、特に言語関係の資料をニューカレドニアやオーストラリアで収集した。社会言語調査も行い、多くの現地語が現在、社会の変容の中で急速に衰退し、次世代に継承されていない状況が明らかになった。

(2) 地域および国際的なネットワークの構築、話者コミュニティの言語意識の向上

本研究・調査を通じて、ニューカレドニアのワウエ部落やヌメアの人々と交流し信頼関係を得ることができた。危機言語が若い世代に継承されなくなっている現状を止めることは容易ではないが、少なくとも現地語母語話者が今の言語状況を理解し、孫の世代に積極的に現地語で話しかける様子が見られた。言語使用と言語意識、アイデンティティーの問題については、学会や著書でも発表した。

2011年に完成予定のネク語の絵本は世代間のコミュニケーションを促進し、子供のネク語への興味を高める効果が期待される。このことは、後に続く研究者(博士課程の学生など)への研究環境が整うことにもつながる。

また、ニューカレドニア、フランス、オーストラリア、アメリカ、ニュージーランド等のオセアニア学研究機関や研究者と協力関係を築いた。チバウ・カナク文化センターが近年行っている先住民語の調査に助言を求められたり教育現場の視察も行った。オーストラリア国立大学太平洋・アジア研究所では2009年、2010年にニューカレドニア言語についてセミナーを行い、また、メラネシア研究者と研究協力を行った。2007年と2010年の国際オセアニア学会で研究発表を行った際は、フランスおよびニュージーランド、オーストラリアの研究者と意見交換をした。

### (3) 文法記述、辞書編纂

研究代表者はティンリン語、ネク語の辞書編纂、ネク語の文法記述に向け、執筆作業と、論文その他による発表を行った。学会その他では大変ポジティブな反応を得た。特に、ネク語はまだ世界で発表された研究が(代表者の論文を除いて)無く、他のオセアニア研究者の興味を惹いた。具体的には、

① ティンリン語・英語・仏語の辞書の編纂に向け、あらたに語彙、表現を追加し、フランス語訳をほぼ完成した(海外共同研究者ブケーによる)。

② ネク語・英語・仏語の辞書の編纂のため

現地調査で語彙、例文等を収集、データベースを構築した。

③ ティンリン語の節構造その他について分析を行い、研究発表を行った。また、ティンリン語の概略について本の項目を執筆した。

④ ネク語の現地調査で得た資料を文字化した後、文法項目ごとに分析を行った。ネク語の文法のいくつかの現象、特徴については学会発表や論文発表を行った。

⑤ ネクで採話した民話の絵本を出版し、さらにネク語、フランス語版の準備のため、ネク語を再度調査し、ジゼル・ウインベによる朗読の録音を行った。この民話と類似した民話をオロウェ語、ハワイ語、タヒチ語、ホワイトサンド語(ヴァヌアツ)等の言語でも見つけることができた(研究協力者による)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Osumi, Midori, Evaluation constructions in Tinrin and Neku (New Caledonia) – Survey with typological overview – 『論集』(東京女子大学紀要) 61巻2号、139-178、2011年、査読なし
- ② Osumi, Midori and Emiko Tsuji, Morpho-semantic features of Tinrin and Neku verbs and event-classifying verbal prefixes, *Tokyo University Linguistic Papers*, vol. 28, 173-195頁、2009年、査読あり
- ③ 大角翠、ティンリン、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類の機能、『東京女子大学比較文化研究所紀要』70巻、1-17頁、2009年、査読あり
- ④ 大角翠、私のフィールドノートからーネク語、『言語』6月号、80-85頁、2007年、依頼原稿

[学会発表] (計5件)

- ① 大角翠、ニューカレドニア言語の存在動詞と *fwi* (ティンリン語) の浮動性、第28回オセアニア学会 2011年3月21日、東京大学
- ② Osumi, Midori, Modal and speech-act constraints on clause-linkage in Neku (New Caledonia)、節連接へのモーダル的・発話行為的な制限に関する研究ワークシ

ョップ、2010年12月12日、人間文化研究機構 国立国語研究所

- ③ Osumi, Midori and Matthias Brenzinger, Changing language attitudes and language use (言語意識と言語使用の変革), 2nd Workshop on Ryukyuan Heritage Languages – Assessment of Language Endangerment and Possibilities of Reversing Language Shift, 2010年3月6日、東京外国語大学
- ④ Osumi, Midori, The labile nature of Tinrin (New Caledonia) verb *fwi*, The 8th International Conference on Oceanic Linguistics, 2010年1月8日、The University of Auckland, Auckland
- ⑤ Osumi, Midori and Emiko Tsuji, Combinatory subclasses in Tinrin / Neku event-classifying morphemes and their semantic motivations, The 7th International Conference on Oceanic Linguistics, 2007年7月5日、Noumea

[図書] (計5件)

- ① Osumi, Midori and Boston Abe, Pourquoi les rats ont-ils des queues? Fukuinkan Shoten Publishers, Inc. forthcoming
- ② 大角翠、言語意識と言語使用の変革 『目指せ! 琉球諸語の維持』下地理則&P. ハイリッヒ編、ココ出版、近刊
- ③ 大角翠(採話) & あべ・ボストン(絵、文)、『ネズミのしっぽ』(こどものとも3月号) 福音館、2010年、32頁
- ④ 大角翠、メラネシアにおける言語とアイデンティティ、『オセアニア学』(吉岡政徳監修/遠藤央他、編)、京都大学学術出版会、2009年、531-542頁
- ⑤ 大角翠、ティンリン語、事典『世界のことば141』梶茂樹、中島由美、林徹編、大修館書店、2009年4月、142-145

[その他] (計6件)

- ① 大角翠、週刊こどもニュース 『世界にはいくつ言語があるの? ニューカレドニアの場合』TVビデオ放映、2010年12月
- ② Osumi, Midori, Evaluation constructions in Tinrin and Neku (New Caledonia), セミナー講演、RSPAS, オーストラリア国立大学、2010年9月9日
- ③ 大角翠、失われていく言語 ~グローバルズムと少数言語~、品川区民大学入門講座 [ユースプラザ] 講演、2008年11月22日
- ④ Osumi, Midori, Tinrin & Neku event-classifying morphemes: Combinatory

sub-classes and their semantic motivations, ニューサウスウェールズ大学、講演、2007年9月

- ⑤ 大角翠、ニューカレドニア・カナク人の食卓と作法、2007年

<http://www.chikyukotobamura.org>

- ⑥ 大角翠、ニューカレドニアの少数言語現地調査（ヌメア、ワウエ）2007年、2008年、2009年、2010年の8月～9月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大角 翠 (OSUMI MIDORI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：10141293

### (2) 研究協力者

Thierry Boucquey, Dr.

Scripps College・Professor

Nicholas Evans, Dr.

Australian National University・

Professor

佐藤寛子、ハワイ大学大学院博士課程

辻笑子、東京大学大学院博士課程